

第二十四回国会  
衆議院

農林水産委員会議録第二十四号

昭和三十一年三月二十七日(火曜日)  
午前十一時三十一分開議

出席委員

村松 久義君

理事吉川 久衛君 理事笠山茂太郎君  
理事白濱 仁吉君 理事助川 良平君  
理事田口長治郎君 理事中村 時雄君

理事芳賀 賀君

足立 勝郎君

五十嵐吉藏君

井出一太郎君

川村善八郎君

木村善八郎君

大野市郎君

鈴木善幸君

伊東正興君

本名武君

横井頼三君

赤路伊瀬幸太郎君

石田省吾君

川俣清音君

田中幾三郎君

日野吉夫君

木村英男君

久保田豊君

大石武一君

谷垣專一君

安田善一郎君

農林政務次官

(大臣官房長)農林事務官

(農業事務官)農業改良局長

(農林事務官)農業事務官

(農林事務官)農業事務官

(農林事務官)農業事務官

出席政府委員

農林事務官

農業事務官

○

○村松委員長 これより会議を開きます。

○この際小委員会の設置についてお諮りいたします。

○

○村松委員長 これより会議を開きます。

○この際小委員会の設置についてお諮りいたします。

○

○村松委員長 これより会議を開きます。

○この際小委員会の設置についてお諮りいたします。

○

○村松委員長 これより会議を開きます。

○

○村松委員長 これより会議を開きます。

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

と思ひます。

特に、マニトベ小麦の横流しを防ぐために、魚油等を用いて人間の食用に耐えないような悪臭をつけて鶏等の飼

る配慮をもつて運用されることを警告いたしまして賛成討論といたします。  
(拍手)

○本村委員長 久保田豊君  
○久保田(豊)委員 私は本法案に対し  
て反対の討論をしようとするものであ  
ります。

第一に、ただいま一部触れましたけれども、政府の畜産計画、増産計画

の基礎には何らはつきりしたところの飼料計画というものはありません。こ

ういう基礎の上に行われる本法の運用といふものは、結果はほぼわかつてお

るといつても差しつかえないと思いま  
す。政府の五ヶ年計画によれば、

牛を非常にたくさんさわやす、大体にお

いて牛を七十六万頭ないしは当局の腹によれば百万頭までふやすということ

ですが、それに対し五ヶ年計画に盛られまことに農業同士の十面は

どうかということになれば、大体政府

のいうところを信用いたしましても、  
輸入の濃厚飼料が八十万トン、それか

ら国内産の麦類並びに雑穀を全体合せ

まして三十一年度だけで八十四万トン、人間の食う物、麦類や雑穀を

牛に食わせて、その不足をさらに輸入でカバーするというようなばかな対策

政策の上に立つての畜産政策というも

のは、長続をするものではあります  
ん。またこれは農家の利益にも、國民

の利益にもなりません。さらに輸入の

すいわゆる日本の輸出入事情、特に外

貨事情等を考えますならば、この八十万トンの輸入が確保せられるという見

通はありません。もしとの八十万  
トノの輸入、ト貿易費等が、どうも

この輸入が外貨事情等でくすれるといふことになれば、日本の畜産全体、

また畜産農家全体が非常に大きな危機に直面することは明らかであります。どういう不安定な、何ら確信のない上に立つておる計画は非常に危ないと思います。さらにもう一つは、国内の自給飼料用としての現在の約三十五万町歩の飼料田畑を、六十六万町歩によぶすこととは、これとてもどれだけ実行の可能性があるかというと、私はほんと怪しいと思う。現に畑や田は、ことじり畠の増反といふものは、年々のいわゆる資金の減少によりましてむしろ行き詰まっている。またこれをやりまして採算が立たぬという事情が一般的に現われてきている。こういう事情の上に立って濃厚飼料の計画を立ておられる。さらに草地の改良等について大きなことを考えておられるようではありますから、今全国的に現われるのは、個人並びに公営を問わず、いわゆる小作料が非常に高くなつて、土地のない農民はこういう草地の利用がだんだんにはまれてきておるというのが今日の実情であります。どうじつ点から見ても、政府は畜産、特に酪農の大増強計画を立てておりますが、これらはくすれて、結局におきましてはアメリカを始めとする外国の農業への日本農業の依存性、その上に立つたいわゆる畜産の非常に不安定な状況を拡大するだけであつて、こういう基礎の上に立つたところの畜産計画、その一環として今までをしておられたが、これがはくすれて、それを国内の方に切りかえるというふうなことは、全く小手先細工にしかすぎない私は思う。これによっては飼料需給の安定なりあるいは酪農農家の安定はどういう期し得ないものであると私は考える。

第二の大きな理由は、私は過日も質問いたしましたけれども、政府の飼料並びに輸入の原麦に対する価格政策が根本から間違つておる私は思う。今般政府は、いわゆる食糧統制に対する一般会計からの繰り入れを、軍事費に回すためにやめておる。その結果どうなつておるかといふと、御承知の通り外国から安い米麦を入れて、これを非常に高く売つて、そうしてそれによつて内国産の価格の穴埋めをしておる。小麦について見ましても、本年度の二百十七億の外国食糧の余剰のうち一トンについて六千三百円ずつの高売りをしておる。この結果はどうかといふと、政府の出した資料によりますと、小麦粉の価格は、指定価格といいますか、これをするで下回つておる。そのしわ寄せが結局に出てますまでも、小麦粉の価格は、指定価格といつておる。今日の状況のようになつておる。今日の状況のように、粉もふすまも両方とも、いわゆる織り込み価格を下回るような状況になつてくれば、製粉が非常な危機に直面することは明らかであります。こういうような価格政策そのものが間違つておると私は思う。政府は、外国から入れたところの原麦の価格をある程度下げて、少くとも両方の織り込み価格が正當に維持されるような政策をとることが一番根本であると思う。この点について何らの配慮を払うことなしに、いわゆる飼料の輸入、ふすまの切りかえ等で小手先を弄しても、これだけが正當に維持されるような政策をとることがどういふ点から見ても、私は今度の法案には反対せざるを得ない。

第三に申し上げたいことは、特に外國から高いふすまをあつちどちで買集めてきて、それを保管しておいて、品質が下るというので安く売って、そうして内地のものを高く買おうといふようなばかな飼料政策はないし、思ひ。すべからくそういうことはやめて、むしろ制安のマニトベその他の飼料小麦をふすまのかわりに入れるべきである。これさえ入れればどんな切れえなんというようなことはする必要はありません。少くともマニトベにおきましては、ふすまの歩どまりは五〇%程度には行くので、これを使つた方が、数量的にはある程度増しても、現在のふすまの程度入れるならば、マニトベをさらにもう少しよけい入れることによって、國民經濟的に見ても対外的に見ても十分に採算が合ひ、しかも優秀な飼料を安く農家に払い下げられて、しかも國庫が損をしないといふことができると思います。こういう点についても、どんと配慮されていないといふ点から見ても、私は今度の法案には賛成ができない。



昭和三十一年三月二十六日印刷

昭和三十一年三月二十一日發行

參議院事務局

印刷者 大藏省印刷局